特集　自然災害に備える〈インタビュー〉

日常と非日常をつなぐ 日本初のフェーズフリーを採用。小清水町防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」

令和5年5月、小清水町に防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」が完成した。町が採用したのは、役場としては日本初となるフェーズフリー。町民が利用しやすいジムやカフェ、コインランドリーなどさまざまな機能を備えた庁舎は、平時はコミュニティスペースとして、災害時には一時避難施設としての役割を果たす。そんな画期的な庁舎を建設した背景には、防災機能の強化に加えてコミュニティの再生といったテーマもあった。新庁舎建設に構想から携わってきた小清水町総務課の細川正彦氏にお話を聞いた。

小清水町総務課長
（兼）小清水町DX推進室
（併）選挙管理委員会事務局長
細川 正彦 氏

全国に先がけてフェーズフリーを導入

――新庁舎建設の背景や経緯、防災拠点型複合庁舎とした理由をお聞かせください。

役場庁舎の建て替えは、建物躯体の老朽化に伴う耐震性の不足が明らかな状況にあり、大きな懸案事項になってはいましたが、行政サービスに直接影響を与えるものではありませんでした。また、庁舎の建て替えは、大きな財政負担が生じることから、全国の自治体においても政策としては後回しにされてきた案件でした。しかしながら、熊本地震や東日本大震災の発生により、役場庁舎が本来持つべき災害対策本部機能の役割が果たせない状況が顕著になったことから、国は全国の市町村に対して初めて庁舎建設に対して財政措置がある起債（市町村役場機能緊急保全事業債）の発行を認めました。これが契機となり、全国的に庁舎建て替えが活発したという背景があります。本町においても、同様のスキームにより耐震性の不足により改修不能と判定されたため、新庁舎の建設を実施することとなりました。

また新庁舎建設に伴い、久保町長が公約にも掲げていた「市中の活性化」「にぎわいの創出」「コミュニティ・地域の絆の再生」に向けた機能を併せ持つ複合庁舎を目指し基本構想を策定しました。やはり他の市町村同様、本町でも人口減少による賑わいの減少が課題になっていましたので、新庁舎建設をそうした地域の活性化に繋げたかったという意図もありました。それに向けた機能の検討に当たっては、三菱UFJ銀行のビジネスマッチングにより、スポーツクラブなどを運営する株式会社ルネサンスをご紹介いただきました。さらにその後、ルネサンスからフェーズフリー協会やコインランドリーを展開するOKULABのご紹介を受けるなど、さまざまな企業にご協力いただきながら、フェーズフリーの概念を踏まえた庁舎の構想を具体化させていきました（写真1、2）。

――フェーズフリーとはどういった概念なのですか？　また新庁舎ではフェーズフリーとしてどんな機能を持っているのですか？

フェーズフリーとは、日常時と非常時という2つの異なるフェーズを垣根なく繋げる、フリーにする、という意味を持ちます。日常時に利用している身の回りの物やサービスを、非常時にも役立てるという考え方です。これまでは、非常時のために防災グッズなどを備えておき、日常時は使用しない、というのが一般的でしたが、それでは非常時の際にとっさに利用できるかといったら、それもなかなか難しいのではないでしょうか。そこで、日頃から活用し、もしもの時もそのまま使えるというフェーズフリーの概念が登場します。

写真1　小清水町の防災拠点型複合庁舎「ワタシノ」の外観

写真2
手前がコミュニティスペース、奥が役場

新庁舎ではこのフェーズフリーの観点から、日常時も非常時も役立つものとして「ジム」「カフェ」「ランドリー」の機能を設け、町民や来町者がいつでも利用できるコミュニティスペースなども設ける計画といたしました（写真3、4、5）。

また庁舎の真ん中にある「じゃがいもストリート」は、防災広場にもなっている駐車場から国道まで、この建物を通って抜けられる仕組みになっています。一時避難所なので、どこからでもこの建物に入れるよう、入口は3つ設けました（写真6）。

フェーズフリーという言葉は聞き慣れないため、難しく聞こえるかもしれませんが、実はそんなに難しいことではありません。災害の影響が広く及ぶと防災機能の脆弱性が顕著になり人災にも繋がりかねません。そこで、脆弱性を小さくする仕組みにするのが、フェーズフリーなのです。

このコミュニティスペースを見ても、この机にあるイスは形も色もすべてバラバラ。もしすべて同じイスだとしたら、一つが壊れたときに、同じ物をまた用意しなくてはいけません。しかし、最初からバラバラだと、どんなイスを加えても問題が発生しない、ということなんです（写真7）。

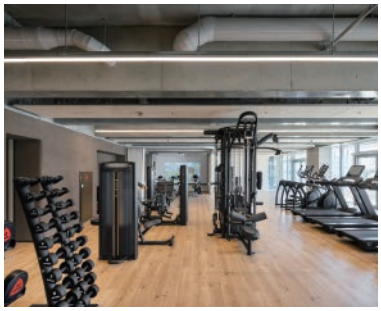

写真3（上段左）　スポーツジム
写真4（上段右）　誰でも利用できるカフェ。コーヒーや軽食を販売
写真5（下段）　ランドリーでは、布団なども洗えて乾燥までできる。アウトドアブランドのモンベル社と提携し、撥水加工ができる洗濯機も

写真6
「じゃがいもストリート」にある案内板。カラフルでわかりやすい

写真7　1脚ずつ異なるデザインのイスが配置されたメインテーブル

画像提供（写真1、3、5、6、7）/空間写真@2023Nacása&Partners Inc.

――フェーズフリーの観点から、ジム、カフェ、ランドリーの機能を備えた理由、災害時の利用例を教えてください。

フェーズフリーに関しては、日常時から非常時にもシームレスに対応できる仕組みを導入しています。庁舎の熱源に温泉熱を活用することにより、電源喪失時においてもポンプを動かすことができる程度のミニマムな非常用発電機で対応が可能となり、イニシャルコストの低減を実現しました。

万が一被災した際は、避難所での生活や車中生活を強いられる場合があります。その時に体を動かすことは、エコノミークラス症候群の防止ですとか、心身の健康のために大変大きな役割を果たします。ジムはそんな観点と併せて、高齢化の進む町内でのロコモ対策や町民の健康促進という意味もあります。日常時は温泉熱を活用したHOTヨガのプログラムを実施する空間であるスタジオは、床に柔らかい素材を使用しており、非常時には床暖房が使えるため、すぐに一時的な避難所へ転用が可能です。

コミュニティスペースには炊き出し可能な設備を導入しています。自動販売機でスナックや冷凍食品などの販売も行っていますが、こちらは備蓄の役割も果たしています。併設するカフェのコーヒーを飲んだり、軽食を食べたりしながらくつろいでいただけます（写真8）。

そしてコインランドリーは非常時に無料開放することで衛生保持に期待ができます。日常時の活用としては、コミュニティの役割もあります。主婦層にとって1日のうちに洗濯をしている時間というのが結構あります。家庭で1人洗濯をする時間を、ここに来ていただき、コミュニティの時間に活用できないかという理由からコインランドリーを設けました。

実際は役場を造ったというよりも、コミュニティスペースを造って、そこに役場の機能がある、と申し上げた方が正しいかもしれません。町民のみなさんにとって、役場は用事があるとき以外は利用しない場所ですが、コミュニティスペースならば、もっと活用が広がりますし、利用頻度も増えます。普段通っているところで、役場の機能が使えるという雰囲気です。

写真8　カフェのイートインや読書、休憩、おしゃべりなど利用者が思いのままに使えるコミュニティスペース

町民の想いを反映した施設に

――構想段階での検討委員会やワークショップの様子、住民の反応を教えてください。

新庁舎については6年ほど前から話し合われていましたが、具体的に構想が始まったのは、令和に入ってからでした。基本計画策定に向けて、検討委員会を立ち上げ、当時の庁舎に足りないことやコミュニティ機能などについてワークショップ形式で開催しました。特に、町長の公約でもある「コミュニティ」に関しては、「飲食ができること」や「絵画などの教室開催、展示スペース」、「気軽に立ち寄れる場所」、「フィットネス的な集まりができる」など多くの意見が出されました。

ワークショップを重ね意見を整理していきましたが、やはりコミュニティを求める意見が多かったように思います。検討委員会は、基本計画が策定されるまでに十数回開催しましたが、その後も何度も集まっていただき、参考意見をとるようにしました。

否定的な意見も覚悟はしていましたが、ありがたいことに皆さん肯定的な意見ばかりで、反対もされませんでした。そこには、コミュニティをなんとかしてほしい、町の衰退をなんとか食い止めなければという町民のみなさんの危機感があったのかもしれませんね。高齢化率は38%、生産人口は減少していますが、ここにはさまざまな年代の方々が集まってきていただいています。

――小清水町で想定されている災害は？　また、一時避難場所として収容人数を教えてください。

小清水町は他の地域に比べて災害が少ないのが特徴です。それでも、予測できない災害も十分に考えられます。地震や暴風雪による停電（胆振東部地震によるブラックアウトのような停電）、ゲリラ豪雨による浸水などが主になると思われます。今後は本年のような異常な気温対策（熱中避難）も災害になると考えております。

収容可能人数は想定では約300人です。非常時は「ワタシノ」に来ていただくよう、町民のみなさんには周知しています。電源は72時間持つ施設ですが、災害対策本部で長期的な避難になりそうだと判断した場合は、多目的研修集会施設「愛ホール」を避難所とし、そちらに移動していただきます。

――今後、増強を検討している機能はありますか？

コミュニティ再生のためには、日頃からの対面による交流の機会が重要だと考えられます。世代を超えた交流の場として心身ともに健康な状態の保持が期待できるからです。また、運用面においては、ソーシャル・インパクト・ボンド（SIB）の導入を検討し、特定保健指導が必要な町民に対してジム機器やスタジオプログラムの利用を促し、将来に係る医療費コストの低減を図る事業を展開していきます。SIBは、事業運営者であるNPO法人に成果報酬を支払うインセンティブを付与することで、同組織の財務力の向上と持続可能な経営環境の構築を図るものです。

avex社が厚生労働省から受託している「健康第一プロジェクト」の一環で、同省の健康行政特別参与を務める杉良太郎氏と、本プロジェクトの健康クリエイターを務めるEXILEのTETSUYA氏により、今後、町民対象のダンスプロジェクトを開催する予定です。

――令和5年5月28日にオープニングイベントを行いましたが、どのような内容だったでしょうか。

グランドオープンに合わせ、にぎわいひろばで午前中は開業式典を行い、本町とこの施設に携わった関連企業の代表者によるテープカットを実施しました。その後、庁舎見学ツアーを実施。午後からは、約1000名の来場者を迎えてのオープニングセレモニーを行いました。小清水幼稚園や町立保育所、へき地保育所の年長児童24名による、世界に一つだけの本物にそっくりな「巨大じゃがいも」のくす玉割りは、一番の盛り上がりを見せました。ジムでは施設内見学、ランドリーでは羽毛布団の洗い方講座、カフェではフライドポテト試食会を聞くなど、施設の機能をみなさんに知っていただく機会となりました。

――施設がオープンして3カ月。現時点での利用状況はいかがですか？

カフェは1日平均65名くらい。ジムは50～60名。ランドリーは、6月の稼働回数が1200回。無料で利用できたのが大きいと思いますが、7月以降は月500～600回です。コミュニティスペースでは、町民が雑談やサークル活動をしている様子が多く見られます。

――今後の抱負をお聞かせください。

小清水町は、カルビーポテトチップス発祥の地です。ロビーにはポテトチップス型のランプを設置したり（写真9）、野鳥の宝庫と言われる本町らしく野鳥のオブジェを設置したりするなど、遊び心を持ち合わせた内装にしました。コインランドリーには、OKULABとモンベルの共同開発による「モンベル撥水コース」を設定するなど、町内外問わずの来庁者の憩いの場となっています。

また、ジムは有人であることにこだわり、インストラクターによるスタジオプログラムを展開。世代間交流の実現が図られ、希薄化しつつある住民コミュニティの再生や町の賑わいの創出に大きく寄与しております。

来年度には外構整備も行われ、庁舎まわりの風景が一変すると思いますが、この施設を中心に、小清水町のコミュニティが再生され、市中が少しでも活性化されるようさまざまなな方々のお力添えもいただきながら、取り組んで参りたいと考えております。

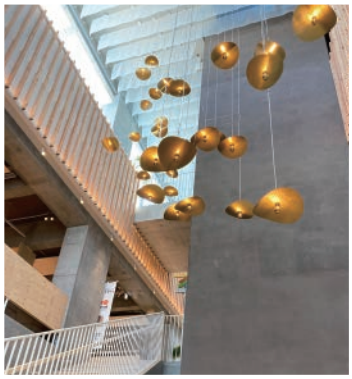

写真9
ポテトチップス型のランプを始め、施設内には憩いの場としてのこだわりが細部に見てとれる